

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 高屋敷飛鳥

本論文は、石器技術論を基礎に、居住形態・行動論や環境適応論といった最新の考古学的な研究視点に基づいて、後期旧石器時代後半期の南関東に展開し「砂川期」と呼ばれてきた学史上著名な石器群を担った人類集団の行動・居住戦略を総合的に明らかにした、完成度の高い意欲的な研究成果をまとめたものである。日本の旧石器時代研究は、「砂川期」の研究から開始され、その後の研究の骨格を形成してきたと言っても過言ではないが、調査研究が全国に本格的に波及した2000年代になると、「砂川期」自体の研究は相対的に停滞した。しかしながらその後も蓄積され続けた各種の調査研究の成果を加味し丹念に分析し総合することで、改めて「砂川期」のもつ先史考古学的意義を描き出すことに結実している。

本論文は7章からなり、第1・2章では、分厚い先行研究の解題と再検討によって研究の目的と方法を述べる。第3章では「砂川期」および前後の時期の古環境研究のデータを総合的に検討することで、当該期の人類集団が開発・利用したと合理的に推定できる資源環境の構造的特質を抽出した。第4・5章では、石器の技術型式および生産技術の特徴を時間軸に沿って綿密に分析した結果、これまで異なる集団の所産として理解されてきた関東西南部を中心に分布する石刃石器群および同東南部の尖頭器石器群が、共通する技術構造を有する互換的な同時異相の単一文化であることを明らかにした画期的な結論を導いている。これらふたつの分布中心を異にする石器群は、利用した石器石材の受給システムに応じて柔軟に使い分けた集団による技術選択の差異を示しており、そのことに基づいて本論文の中心となる第6・7章の議論が展開する。

第6・7章では、相模野台地や武蔵野台地、下総台地といった南関東の小地域内の集団が採用した石器石材の効率的な獲得・運用システムに応じて、小・中型動物狩猟を主要な生業とした集団によって、居住・行動戦略が巧みに使い分けられていたことを明らかにした。この結論は、石器の形態学的差異に基づく地域差をそのまま集団や文化の差異に還元してきた従来の研究法を脱し、周到な技術分析に基づいて社会的側面の検討にまで止揚することに成功しており、旧石器考古学における研究の水準をさらに高めたと評価できよう。

惜しむらくは、「砂川期」の生活システムが前後の時期に比してどのように変遷してきたかに関する説明が十分ではない点が挙げられるのだが、それは本論文の主要な課題ではなく、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。